

ショーペンハウアーにおける美と有機体論 : カント『判断力批判』との関わり

中本, 幹生
西南学院大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1445870>

出版情報 : 哲学論文集. 48, pp.73-87, 2012-09-29. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

ショーペンハウアーにおける美と有機体論

——カント『判断力批判』との関わり——

中本 幹生

問題提起

ショーペンハウアー哲学とカントの『判断力批判』との関係が問題にされる場合、従来、美学の分野における比較対照が多くなされてきた。それに対して、カントの目的論（有機体論）とショーペンハウアー哲学との関係は十分に注目されてこなかったように思われる。しかし『判断力批判』が趣味批判ばかりでなく目的論も含む限り、ショーペンハウアー哲学と『判断力批判』の関係は、同時に目的論をも視野に入れた上で考察されるべきではないだろうか。即ち第一部（趣味批判）及び第二部（目的論）を含めた『判断力批判』全体を視野に納めて比較検討することによってはじめて、ショーペンハウアー哲学と『判断力批判』との関係は明瞭に把握されるように思われる。

ところで、両者が美学の分野で比較対照される際のテーマとしては、美的観照の際の意志からの解放（ショーペンハウアー）と無関心的適意という美の規定（カント）との関連性をめぐる議論が、その典型例として挙げられるだろう。しかし

この点においてシヨープンハウアーとカントの親近性を強調するにせよ差異性を指摘するにせよ、いずれの立場も、意志からの解放と無関心的適意という美の規定との距離を測っているものである限り、結局のところ、いわばカント的な美の規定の視点からシヨープンハウアー美学の特質を論じていることに変わりはない。⁽¹⁾ 言い換えれば、カント的な枠組みの中でシヨープンハウアー美学との比較を行っているということである。しかし、はたしてシヨープンハウアー美学とカントの美の規定は、そもそもこのような形で比較対照されうるような共通の土俵の上に立っているのだろうか。むしろ両者は、本質的に異なつたものではないのだろうか。結論の一つを先取りして言えば、本稿は、シヨープンハウアー美学とカントの趣味批判とは本質的に異なつたものであることを示そうとするものである。カントは美の考察を当時の完全性の美学（バウムガルテンがその代表者として挙げられる）との対決を通して構築しているが、むしろこの完全性の美学の系統にシヨープンハウアー美学が属することを本稿は示す。それにより、シヨープンハウアー美学とカントの立場との決定的な差異が明らかになる。それはまた、従来の解釈の視点では看過されていたシヨープンハウアー美学の位置づけを明らかにすることもある。

もちろん「無関心的適意」と「意志からの解放」は、それだけとってみればある類似性を持つことも確かであろう。しかしそれはいわば表面的な類似性であり、より本質的な構造において互いに異なっているということである。このことを把握するためには、「無関心的適意」と「意志からの解放」との比較といった個々の個別的な類似点を取り上げた考察によるのでは不十分である。そうではなく、こうした従来の議論の枠組みとは全く異なる視点から光を当ててみなければならぬ。即ち、先に述べた、目的論（有機体論）をも含めた『判断力批判』全体を視野に入れた上で考察する必要があるのである。このことよつて同時に示されるのは、シヨープンハウアーの有機体論とカントの有機体論との構造的な同一性であり、美の分野ではなく、むしろこの点において両者が密接な連関性をもつことが明らかになるだろう。

それ故、本稿では、シヨープンハウアーの名著『意志と表象としての世界』を『判断力批判』との関わりという観点から、目的論と美学の分野でそれぞれ比較検討を行う。即ち、『意志と表象としての世界』における有機体論とカントの有機体論の

構造上の類似性をまず考察し、それによつて後者の前者に対する影響の跡を確認する作業を行う(二)。さらに、この観点から、あらためてシヨールペンハウアー美学とカントの趣味批判の關係に考察の光を当てることにより、両者が大きく相違した立場にあることが明らかにされる(二)。即ち、シヨールペンハウアー美学はむしろ完全性の美学の系統に属することが示される(三)。

一 プラトンのイデアと目的概念

— シヨールペンハウアーとカントにおける目的論(有機体論) —

シヨールペンハウアーが『意志と表象としての世界』において美について主題的に論じているのは、その第三卷においてである。この卷の表題中に「プラトンのイデア、芸術の客観」という言葉が見られる。このことは、シヨールペンハウアー美学における中心的なテーマが、プラトンのイデアの認識にあることを示している。それを明示的に読み取れるテキストとしては、美学的な考察様式における構成要素の一つとしての客観の側の側面⁽²⁾を特徴づけている、次の箇所を引用すれば十分である。「個別的な事物としてではなく、プラトンのイデアとして、即ちこれら諸物の類全体の不変な形式(Form)としての、客観の認識」 (§38, S.230)。

さて、このように、シヨールペンハウアーにとってはイデアを認識することこそが美的な認識なのであるが、このプラトンのイデアが初めて導入されるのは、その前の卷、即ち『意志と表象としての世界』第二卷「意志としての世界の第二考察…意志の客観化」においてである。この卷では、表題どおり意志について主題的に論じられると同時に、また副題が示すとおり意志の客観化についても論じられる故に、プラトンのイデアがここで導入されるのである。なぜなら、シヨールペンハウアーによれば、イデアとは意志の客観化の諸段階だからであり、しかもそれは「無数の個体の中に表現されながら、これら個体の到達しえない模範、あるいは物の永遠の形相として存在し、それ自身は時間と空間という個物の媒介に入つてゆかず、

そうではなくて確固として存立しており、いかなる変化にも服さず、常に存在し、決して生成したものではない」(285, S134)。このようにアイデアとは、生成消滅をしない不変な存在である。不変であるということは、さらに第三巻で詳論されているように、時間・空間・因果性の形式から免れているということである。数多性は時間・空間によって制約され、それらのなかでのみ考えうるものであるから、これらの形式を脱しているアイデアが数多性を持つということはありえない。即ち、それは一性 (Einheit) を持つ。

ところで、この一性を持つアイデアを認識することこそがショーペンハウアーにとって美的な認識であるということが、カントの趣味批判との関係を考察する本稿のテーマにとって重要な論点をなす。それを示すために、まず『意志と表象としての世界』第二巻の中でショーペンハウアーが有機体について論じている箇所注目してみよう。そこで、ショーペンハウアーはアイデアのこの一性ということを軸に論を展開している。

「『有機体の』部分のこの必然的な並存や発展の相互継起は現象するアイデア、即ち自身を現す意志の働きの一性 (Einheit) を廃棄しない。むしろこの一性はいまやその表現を、因果律に従ったこれら部分と発展の相互の必然的な関係および連結に見出す。…

このこと「一性を示すこと」はあらゆる部分の相互の必然的な関係と依存性によって生じ、このことによって現象においてもまたアイデアの一性は回復されるのである。従って、我々はいまや有機体のかの様々な部分と機能を相互に互いの手段および目的として認識し、有機体自身をこれら全てのものの究極の目的として認識する」(288, S135)。つまり、「…一方でそれ自身単純なアイデアは有機体の部分および状態の数多性へと分散して入り込み、また他方で、それらの必然的な結合によってアイデアの一性は回復される」(ibid.) わけである。

このテキストにおける議論のポイントは、有機体の諸部分の数多性とアイデアの一性との関係にある。これら諸部分は互いに原因と結果であることによってアイデアの一性を顕現させる(そしてこのような一性を示すものが目的としての有機体であ

る)。本来イデアは、一性を持つものとして、数多性の原理である時間・空間の形式以前のものとしてある。しかしその一性は、有機体（目的）において、その有機体諸部分の相互的な因果関係によって再び回復されるわけである。以上のことを図式的にまとめると、次のような三項関係として表現できるだろう。即ち、「イデアの一性——数多性を持つ諸部分の相互的因果関係——目的としての有機体（イデアの一性の回復）」。

ところで、ショーペンハウアーが論じている有機体のこの構造は、カントが『判断力批判』第二部「目的論的判断力の批判」において定式化した有機体（自然目的）の構造と極めてよく類似している。カントは次のように有機体を定式化している。

「自然目的としての物〔有機体〕のために第一に要求されることは、諸部分は…全体との関係によってのみ可能であることである。というのとは物自身は目的である、従ってそこに含まれるべき全てのものをア・プリアリに規定しなければならない概念もしくは理念の下にある。…

…「さらに」第二に要求されることは、その諸部分が、互いに相互的にその原因と結果であることによって、全体の一性（Einheit）へと結合されていることである。というのもこのような仕方でのみ、逆に（相互的に）全体の理念が再び全ての部分の形式と結合を規定することが可能だからである…。」（KU, 290f.）

つまりカントによれば、ある物を自然目的（有機体）と判定するためには、先ずその物の諸部分が互いにその原因であり結果であることによって全体を産出するでなければならぬ。そうして今度は逆に、あらゆる諸部分の形式と結合を規定している全体の概念もしくは理念が、全体の原因と判定される。従って、「作用因の結合が同時に目的因の結果と判定される」³（KU, 291）。

カントにおいても、理念とは表象の絶対的な一性であり、質料が物の数多性であることと対置されている³。それ故、やはりショーペンハウアーの場合と同様、ここでも議論のポイントは、有機体の諸部分の数多性と理念の一性との関係にある。

これら諸部分は互いに原因と結果であることによって全体の一性へと結合される（そしてこのような一性を示すものが目的としての有機体である）。そしてこの全体（有機体）は、全体の理念によって規定されているわけである。即ちここでも、図式的にまとめると「理念の一性——数多性を持つ諸部分の相互的因果関係——目的としての有機体（一性を持つ理念がそれを規定している）」という三項関係が成り立っている。

この両者の有機体論の構造の同一性は明らかであろう。そしてこの構造の同一性において、カントの有機体論における全体の理念 (Idee) が、ショーペンハウアーの有機体論におけるイデア (Idee) に相当していることも明白に読み取れるだろう。というのも、ショーペンハウアーにおいては、諸部分が相互的な因果関係にある有機体において表現される一性はイデアの一性であり、諸部分へと分散する以前のイデアの一性とその相互関係を通して再び回復されると理解されているが、それと同様にカントにおいても、全体（有機体）の一性へと結合する諸部分の相互関係を規定しているのは全体の理念（表象の絶対的な一性としての）だからである。

またカントにおいては、この全体の理念は全体の原因、即ち「目的因」(KU, 291) とみなされている。つまりこの全体の理念とは目的の概念に他ならない。⁴⁾ 言い換えれば、ショーペンハウアーの有機体論におけるプラトンのイデアとは、カントにおける目的概念に他ならない。

カントを高く評価するショーペンハウアーが、彼自身の有機体論を論ずるにあたって、カントの有機体論とこのような構造の同一性を示しているとすれば、そこにカントの『判断力批判』からの影響がないとは考えられないのではないだろうか。即ちショーペンハウアーは、カントの理念 (Idee) にプラトンのイデア (Idee) を見たのだと思われる。そもそもカントの理念という術語自体がプラトンのイデアに由来しているということが、このことを補足的に証明してくれる。つまり、ショーペンハウアーのこのような理解はむしろごく自然な理解だということである。カントは『純粹理性批判』において初めて理念を導入する際、プラトンのイデアについて触れ、理念 (イデア) という表現をそのものと意味 (プラトンが使っ

いた意味)に従って保存することを要求していた(A319=B376)。しかもその文脈の中で、カントは次のように述べている。「…自然そのものに関しても、プラトンは正当にもその源泉がイデアにあることの明らかな証明を認めた。植物、動物、世界の構造の合法的な配列…は、次のことを明らかに示している。即ち、それらがただイデアに従つてのみ可能であるということ、そして、確かにその現存の個々の条件の下にある個々の被造物はその種の最も完全なもののイデアに一致しないとしても、…しかしこれらのイデアは最高の悟性においてはそれぞれ不変的に、凡通的に規定されており、物の根源的な原因であるということ…を。表現の行き過ぎとてを別にすれば、世界秩序の自然的なものを模写と見なすことから、目的即ちイデアに従つた世界秩序の建築術的結合へと上昇して行くこの哲学者の精神の高揚は、尊敬と追隨に値する努力である…」(A317=B374E)。

このテキストにおける「目的即ちイデア」という置き換えに注目しよう。既にここにおいてカントは、イデアを目的と見なしている。そして理念に基づく世界秩序の合目的統一とてこの目的論的思惟は、有機体の構造にも適用されるのである(vgl. A688=B716)。従つて、先に『判断力批判』をテキストに検討した、統一的な全体へと結合する諸部分の形式を規定する全体の理念、という有機体論における理念(=目的概念)は、そもそもプラトンのイデアに由来しているのである。

以上、この節ではショーペンハウアーとカントの目的論(有機体論)の関係を考察した。それによつて明らかになったことは、カントにおいてもショーペンハウアーにおいても、有機体とはその諸部分が相互的な因果関係によつて一性へと結合されたものであり、この一性という表象は一方ではカントの目的概念(全体の理念)に、他方ショーペンハウアーではイデアに相当している、ということであった。即ち、ショーペンハウアーのイデアはカントの目的概念に他ならないのである。

二 ショーペンハウアー美学 対 カントの趣味批判

前節において、ショーペンハウアーのアイデアがカントの有機体論の枠組みにおける目的概念に相当する、ということ被我々は見た。そしてこのことが、ショーペンハウアー美学とカントの趣味批判との決定的な対立点の把握へと我々を導く。なぜなら、美の定式化において、このアイデア＝目的概念に対するショーペンハウアーとカントの態度は、まさしく正反対だからである。

まずカントから見てみよう。カントは、反省的判断力の原理を合目的性の原理として特徴づけている。合目的性の概念には主観的合目的性と客観的合目的性の二通りがあり、前者は美的判断力の、後者は目的論的判断力の原理である。客観的合目的性を判定するためには目的の概念を必要とする。それを自然に帰することによって我々はある自然の所産（有機体）を自然目的として表象する。これに対して、主観的合目的性（美）の判定は目的概念に基づかない。目的なき合目的性と呼ばれる美のこの特質を、カントは次のように定式化する。「美は、合目的性が目的の表象無しにある対象において知覚される限りにおいて、この対象の合目的性の形式である」（KU, 61）。

美と有機体とをそれぞれ特徴づける、主観的合目的性と客観的合目的性とのこの対比が、ここでの我々の論旨において重要である。前者は目的のない合目的性であるのに対して、後者は目的概念を前提する合目的性である。美を目的なき合目的性とするカントのこの特徴づけ、それは、美を客観的合目的性として理解していたカント当時の伝統的な美学、いわゆる完全性の美学との対決において成立した定式である。

『判断力批判』第十五節において、目的のない単なる合目的性の形式と完全性との対比を明瞭に読み取ることができる。対象の完全性とは、対象の（内的）客観的合目的性である（KU, 44）。客観的合目的性を判定するには常に目的の概念が必要と

される。ここで目的とは、その概念が対象の可能性の根拠とみなされるものであるから、このことは、その物の概念がまず前提されるということの意味している。即ち、「…客観的合目的性のある物において表象するためには、その物がいかなるものであるべきかについての概念が先行するだろう。そしてこの物における多様なもののこの概念（これがこの物における多様なものの結合の規則を与える）への合致は物の質的完全性である」（KU, 45）。一方、主観的合目的性に関しては次のように言われている。「物の表象における形式的なもの、即ち多様なものの一なるもの（Eines）（それが何であるべきかは未規定である）への合致は、それ自体では全く客観的合目的性を認識させてくれない。なぜなら、目的（その物が何であるべきかという）としてのこの一なるものは捨象されているので、観照する者の心における表象の主観的合目的性以外の何ものも残らない」（KU, 45f.）。

主観的合目的性においては、多様なものが一なるもの（Eines）へと合致しているとしても、しかしこの一なるものそれ自体は未規定である。右に引用した二つの文を比べて分かるように、この一なるものは、客観的合目的性における物の概念、つまり目的概念の位置に正確に対応している。カントは、美の定式化において、この目的概念としての一なるものを捨象して、ただ多様なもののそれへの合致という形式のみを残す。まさにこの目的概念の捨象こそが、完全性の美学に対するカントの対決姿勢を端的に示すものであり、それまでの美学とカントの立場とを分かつ分水嶺である。

他方、ショーペンハウアーにとつては、イデアこそが美的認識の対象であった。前節において見たように、ショーペンハウアーのこのイデアはカントの目的概念に相当している。有機体の判定も完全性の判定も、同じ客観的合目的性についての判定であり、その物の概念（目的概念）を前提している。ところがカントは美の定式化においてこの目的概念を捨象するのに対して、イデア（＝目的概念）を認識することこそショーペンハウアーにとつて美的認識なのである。目的概念を巡り、両者は全く対極的な立場にある。イデアを美的認識の対象とする美学は、むしろ目的概念（物の概念）を前提する美学と共に通の基盤を持っており、その系譜に連なっていると言わざるをえないのではないだろうか。即ち、従来多くの解釈者達に

よってカントの趣味批判と比較検討されてきたシヨープンハウアー美学は、しかし実は完全性の美学——カントがそれとの対決を通して自らの美の定式化を行ったところの美学——の系統に属するのである。

三 シヨープンハウアー美学と完全性の美学

ところで、シヨープンハウアーの言うアイデアの認識とは具体的にはどのような事態を意味しているのだろうか。あるものを美と見て取ること、即ちアイデアとして認識することは、それを個別的な事物として見るのではなく、類全体の不変な形式をそこに見て取ることである。このことは、アイデアが時間・空間・因果性の形式から免れた、生成消滅をしない不変な存在であることに対応している。個別的な事物は時間・空間・因果性の形式の下でのみ個別的なものとして現れるが、これら個別化する原理としての形式が脱落したところでは、客観はその類の性格を現すものと考えられるからである。それは全てのも自然的な物体がもつ根源的で変化しない形式であり特性である (Vgl. §30, S.199)。「…天才は、根拠律に従う諸関係の認識を捨て、物の中にそのアイデアだけを見かつ探そうとし、直観的に自身を表明するこれらの物の本来の本質を把握しようとするのであり、この本来の本質という点において一つの物はその全体の類を代表する」 (§§ 52-56)。例えば、ある樹木を美的な対象としてみる場合、「従って樹木ではなくそのアイデアを認識する場合、それがこの樹木であろうと千年前に花を咲かせていたその祖先であろうと…即座に無意味になる」 (§41, S.217)。この時、我々がそこに見ているのはあれやこれやの個別的な樹木ではなく、類としての樹木の不変的な形式そのものである。この類としての形式は不変な一なるものとして、あらゆる個別的な樹木の数多性を代表している。それ故美におけるアイデアの認識においても、有機体におけると同じく、やはり一性 (Einheit) ということがポイントであるといつてよい。芸術について論じる文脈の中で、シヨープンハウアーは概念との対比においてアイデアを語りながら、この一性ということをその性質として明白に述べている。「アイデアと概念は、両者とも一性

として現実的な物の数多性を代表するという点においてある共通なものを有している」(S49, S275f.)。イデアは「事物の前なる一性 (unitas ante rem)」であり、概念は「事物の後なる一性 (unitas post rem)」とも言われる (S49, S277)。美的な認識におけるイデアとは、抽象作用を介して後から得られる一性ではなく、直観的に把握されるところの、個物の数多性に分かれる以前の根源的な一性である。それはあらゆる根拠律以前の、主観―客観の根本関係の形式のみが妥当する次元にある。概念との差異という問題はまた別に論じられるべき問題としてあるにしても、しかしここで我々が注目したいのは、イデアの認識とは直観的に把握される一性であるということである。

カントは完全性即ち客観的合目的性を定式化する上記引用文(本稿第二節)において、この合目的性は、その物が何であるか、という物の概念(目的概念)を前提していることを明らかにし、この目的概念を一なるもの (Eines) と言っていた (KU, 45f.)。この一なるものへの多様なものの合致が、客観的合目的性である。このように一なるものを前提した上で、多様なものの合致を表象するという完全性(客観的合目的性)の美学は、イデアの一性を直観的に把握することを美的認識とみなすシヨールベンハウアー美学と構造の同一性を持つ。

最後に、以上の考察を完全性の美学の代表者であるバウムガルテン自身の記述に基づいて確認しておこう。彼は美を次のように定式化している。「完全性が現象である限り、あるいは完全性が広義の趣味によって認められる限り、その完全性が美である」⁽⁷⁾。そしてこの完全性を、バウムガルテンは次のように定義している。「多くの事柄が一緒に集まって一なるもの (Eines) の十分な根拠を含むならば、これらの事柄はこの一なるものへと合致する。この合致それ自身が完全性であり、事柄がそれへと合致する一なるものは、完全性の規定根拠である」⁽⁸⁾。ここでは規定根拠としての一なるものがまず前提されている。そして完全性とは、多様なもののこの一なるものへの合致であり、その感性的な表象が美である。従って完全性の美学における美とは、この一なるものへの合致の表象として、その対象の一性の把握に他ならない。「諸対象のこの一性は、それが現象となる限り、美学的と名づけられねばならない」。だからまたアウグステイヌスも一性を好み、それを『全ての美の

形相 (forma)』と名づけるほどであった⁽⁹⁾。

従って完全性の美学における美とは、この一性の感性的な把握に他ならず、それはショーペンハウアー美学における一性としてのイデアの直観と同系統にある⁽¹⁰⁾。バウムガルテンはこの一性に関して「全ての美の形相 (forma)」というアウクステイヌスの言葉を参照しているが、ショーペンハウアーもまたイデアをしばしば形相と呼ぶ (vgl. §25, S.154, §31, S.200, §34, S.210)。即ち完全性の美学においても、美しい物はそれをそのものたらしめている形相をその完全な形において示していると考えられるとすれば、それはショーペンハウアー美学におけるイデア——無数の個体の中に表現されながらこれらの個体の到達しえない模範、あるいは永遠の形相 (これをショーペンハウアーは類としての不変な形式 (Form) とみる) という考えと重なり合う。ショーペンハウアーにとっても、イデアとはその物の完全な姿であった。「手元にある個々の物においてただ不完全に現存し、変容を受け弱められて現存しているものを、天才の考察様式「美的な考察様式」はその物のイデアへ、即ち完全なものへ高める」 (§36, S.228)。

結 論

以上、ショーペンハウアー哲学における美と有機体論とカントの『判断力批判』を比較検討してきた本稿の考察は、次のようにまとめられる。

一、ショーペンハウアーの有機体論はカントの有機体論と極めて類似した構造を持つ。それ故、この点においてショーペンハウアーはカントから大きく影響を受けたのだと考えられる。ここでプラトンのイデアはカントの目的概念の位置に相当している。

二、ショーペンハウアー美学とカントの趣味批判は対極的な立場に立つ。カントは美の定式化に際して目的概念を捨象し、

目的なき合目的性として美を特徴づけるのに対して、ショーペンハウアーにとつては、この目的概念に相当するイデアの認識こそがまさに美的な認識だからである。これは、従来看過されてきた、ショーペンハウアー美学の位置づけについての一つの新しい見方へと我々を導いてくれる。即ちショーペンハウアー美学は、カントの趣味批判にはなく、むしろ目的概念を前提する美学、即ち完全性の美学の系統に連なっているのである。

註

ショーペンハウアーの著作からの引用は、A. Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*. Erster Band. Sämtliche Werke Bd.1, München 1911 (Herausgegeben von Dr. Paul Deussen) に依り、その節と頁数を示す。

カントの著作からの引用は、『純粹理性批判』(*Kritik der reinen Vernunft*) は第一版(A版)＝第二版(B版)の頁数を、『判断力批判』(*Kritik der Urteilsraft*) はKUと略記して原版第三版の頁数を、『判断力批判のための第一序論』(*Erste Einleitung in die Kritik der Urteilsraft*) はEEと略記してアカデミー版カント全集第二十巻の頁数を示す。

以上の著作の頁数は本文中の括弧内に記すが、その他の著作については適宜註において示すことにする。

- (1) カントの無関心の適意とショーペンハウアーにおける意志の無い認識との類似性を指摘する論者としては、M. Dohrnleit-Helmich が挙げられる (*Ästhetik bei Kant und Schopenhauer. Ein kritischer Vergleich* in: Schopenhauer-Jahrbuch64 [1983], S.127-129)。
- またハイデガーも、カントの関心なき適意という美の規定を、ショーペンハウアーは意志からの解放と捉え直したとみている (M. Heidegger, *Gesamtausgabe* Bd.43, S.124-129)。ハイデガーが引用する次のデルタイの言葉は、両者を同一視する一般的な理解を端的に示しているといえるだろう。「無関心の適意についてのカントの命題は、とりわけ見事にショーペンハウアーによって表現された」(M. Heidegger, *ibid.*, S.129)。しかしハイデガー自身は、このようにカントの美の規定を捉え直すことによって、ショーペンハウアーはカントを誤解したと見ている。が、たとえ誤解と解釈するにせよ、まさにそう解釈することで、ショーペンハウアー美学がカントの美の規定の影響下にあることを認めていることには変わりはない。

B. Neymeyr は、ハイデガーが提起したこの問題についてさらに詳細な考察を加えてくる（„Ästhetische Subjektivität als Interesse-
loser Spiegel? Zu Heideggers und Nietzsches Auseinandersetzung mit Schopenhauer und Kant“ in: *Philosophisches Jahrbuch* 102 [1995],
S.225-248）。Neymeyr はハイデガーがショーペンハウアーを誤解していると指摘しつつも、基本的にはハイデガーと同様、カ
ントとショーペンハウアーにおけるそれぞれの無関心性の違いを強調している（B. Neymeyr, *ibid.*, S.235）。

(2) ショーペンハウアー美学とカントとの関係について、その美的観照の際の主観の側面に関しては、筆者は一度論じたことがある
（『ショーペンハウアー美学におけるカントとプラトン』日本倫理学会編『倫理学年報』第四十九集、二〇〇三年、所収）。この抽
論において筆者は、ショーペンハウアー美学における美的認識の主観は、カントの「美的判断力の批判」からではなく「純粹理
性批判」からの影響こそ決定的である、ということを論じた。これに対して本稿では、主として美的観照の際の客観の側面に焦
点を絞り、ショーペンハウアー美学とカントとの関係を考察する。

(3) 「…質料が物の数多性であるのとは異なり、理念は表象の絶対的一性である」（KU, 297）。

(4) カントは「判断力批判」第十節において、次のように目的を定義している。

「目的とは、概念が対象の原因（その可能性の實在的根拠）と見なされる限りにおいて、ある概念の対象である。…従ってある対
象の認識ばかりでなく対象それ自身（その形式もしくは實在）が結果として、ただ結果の概念によつてのみ可能的と考えられる
場合には、我々はそこに目的を思いみるわけである」（KU, 32）。

つまり、ある対象が目的である場合、その対象の概念（目的の概念）が目的因となる。これを本稿の本文における有機体の例に
即して言えば、有機体（全体としての）は目的であり、そしてその全体の概念が目的の概念であり、かつ目的因である、とい
うことである。

(5) また、本稿第一節に引用した『純粹理性批判』のテキスト参照。カントはプラトンのアイデアを「最も完全なもの」（A318=B374）
とみなしている（vgl. A568=B536）。¹¹⁾ でもアイデアと完全性との連関性を窺うことができる。

(6) このことはまた、本稿第一節において示した、有機体とはその諸部分が相互的な因果関係によつて一性へと結合されたものであ
り、その一性とは元来アイデアの一性に基づくものであるということからも補足的に証明されるだろう。

(7) A. G. Baumgarten, *Metaphysik*, Halle, 1783, §488.

(8) A. G. Baumgarten, *ibid.*, §73.

(9) A. G. Baumgarten, *Aesthetica*, Frankfurt a. d. Oder, 1750/58, §439.

(10) ただし、完全性の美学とショーペンハウアー美学の相違点も無視してはならないだろう。完全性の美学があくまで完全性の感性的な表象を美とするのに対して、ショーペンハウアー美学におけるイデアの直観は、時空の形式を脱しているからである（その意味では、ショーペンハウアー美学におけるイデアの直観はむしろ知的直観に近いようにも見える）。しかし、本稿は基本的にカントの美の定式との対比という視点の下に考察している、という点を強調しておきたい。即ちこの視点の下では、完全性の美学およびショーペンハウアー美学は、ともに物の概念を前提した一性の把握として理解でき、その点では共通の基盤の上に立っているのである。また、カントの立場から見れば、完全性の美学における美の把握の仕方も結局は知的直観とならざるをえないのである（*EE*, §281）。なぜなら、対象に完全性を帰する判断は本来論理的判断である故、この美学によれば美的な表象の仕方と論理的な表象の仕方が種別的に区別されないことになってしまいうからである（*ibid.*）。ともあれ、完全性の美学とショーペンハウアー美学の相違についてのより詳しい考察は、今後の課題としたい。

（西南学院大学・非常勤講師）

